

【特集論文】

小学校における生活科と社会科の連携・接続 —教科の特質に着目して—

池野 範男（日本体育大学）

本稿の目的は、小学校における1-2年の生活科と3-6年の社会科の関係とその接続の問題を検討することである。そのために、社会科の立場から、この問題を取り上げる理由を説明したのちに、生活科と社会科の教科の特質に関して比較した上で、類似単元を取り上げその取り扱いの類似と相違を解明し、2つの教科の関係とその連携の可能性を明らかにした。

その結果は、次の6点にまとめられる。

1. 生活科と社会科はともに教科であるが、教科としての性格が異なる。
2. 生活科は、人間形成的な教育を本質とした教科であり、一教科でありながら、教科を超えている。
3. 社会科もまたは、一教科でありながら、社会をわかる（社会認識）、あるいは、社会を新たに作り出す（社会形成）を基本目的とし、公民的資質育成を教科目標としていることで、教科を超えている。
4. 生活科と社会科の両教科は、連携・接続しているところと、包摂・超越しているところがある。
5. 学習者（自己）と社会との関わりに着目すると、生活科は自己から社会への関わりを、社会科は自己と社会との相互の関わりを、それぞれ取り扱う。
6. 生活科と社会科は、生活科から社会科へ接続・連携することで、両教科ともに、知識・技能、思考力・判断力・表現力等を発展させるとともに、それぞれの教科の目標達成に寄与する。

キーワード： 自己，社会，関わり，教科の本質，目標達成

Relationship between life environmental studies and social studies in the primary education, based on characteristics of the school subjects

Norio Ikeno (Nippon Sport Science University)

The purpose of this paper is to clarify the relationship and its connection between life environment studies of grade 1 - 2 and social studies of grade 3-6 in the elementary school. From the viewpoint of social studies this paper is to explain the reasons of picking up the relationship, compare characteristics of school subjects of the life environmental studies and social studies, and find up similarities and differences on similar units on two school subjects and the relationship and its cooperative possibilities of two school subjects.

The finding out of this paper is the following;

1. Two school subjects are different on characteristics of two school subjects.
2. The life environmental studies is a school subject and beyond a school subject while the subject does the education of character building.
3. Social studies is too a school subject and beyond a school subject while the subject aims to build up citizenship, the member of the nation and society.
4. Two school subjects are going to cooperate and connect, which are subsumed and transcended.
5. Concerning with a learner(self) and society, the life environmental studies treats from learner, concerning to society, social studies handle mutual relations between each learner and society within the society.
6. Connecting and cooperating social studies from the life environmental studies, two school subjects are to develop the knowledge and skills, thinking, judgement and the expression as well as to contribute to develop and achieve each aims.

Key Words: self, society, relationship, characteristics, attainment of goals

1. 問題の所在

本稿では、小学校における1-2年の生活科と3-6年の社会科の関係とその連携・接続の問題を検討することにしたい。

そのために、まず、問題の所在として、社会科の立場から、なぜこの問題を取り上げるのかを説明したのちに、2.で、生活科と社会科における教科の特質、教科構造の相違を、3.で、生活科と社会科との連携・接続の可能性について考察し、類似単元を取り上げその取り扱いの違いを分析し、連携・接続の観点から2つの教科の関係を解明し、その連携・接続の可能性を明らかにする。

本稿の立ち位置は、社会科にある。この位置から、生活科と社会科の関連を考察する。

社会科教育を研究・教育するひとは、1998(平成10)年の学習指導要領は忘れることができないものであろう。この学習指導要領によって、小学校低学年社会科がなくなり、高等学校社会科が地理歴史科・公民科に分かれた。それは、低学年社会科廃止論、社会科解体論と呼ばれ、ひと騒動となった(緊急シンポ世話人会 1996)。多くの社会科教育研究者はいまでも生活科に反発するひとがいる。

とはいえ、すぐに生活科反対論は弱まり、生活科が定着することになった。その要因は「批判的議論が十分な根拠をもちえなかったこと」と「制度としての生活科を受け入れ、そのなかで限定的に研究を行う傾向によ」ったと総括され、対抗するには、原理的で本質的な研究が必要であったと指摘されている(佐長 2001,pp.415,416-17)。また、生活科と社会科を比較した先行研究(二階堂 2012)では、生活科は「他教科(社会科を含め)とは異なり、子どもの発達段階に沿った学習様式を重視」する一方、社会科は「より客観的知な知識の獲得が目指されている」。2つの教科には、「指導観や学習観の違いがある」(p.314)と指摘されている。

多くの研究(宮本 1991, 末政 1993, 石川 1994, 伊藤 1996, 日台 1996, 渡部・初沢 2001, 寺尾 2014,2015, 加納 2016)では、生活科と社会科の違

いが強調されている一方で、連続性や連携・接続に焦点化されることは少なかった(岡山県小学校教育研究会社会科部会 1991,渡部・初沢 2001)。実際の授業や単元でもどのように連携・接続するのが十分検討されていない。そのことは実践的にも指摘されている(日台 1996, p.383)。

2017(平成 29)の学習指導要領の改訂過程で、中央教育審議会(2016)の答申で、生活科に関して次の4点が指摘され、充実が期待されている(p.155)。

- 活動や体験を行うことで低学年らしい思考や認識を確かに育成し、次の活動へつなげる学習活動を重視すること。「活動あって学びなし」との批判があるように、具体的な活動を通して、どのような思考力等が発揮されるか十分に検討する必要がある。
- 幼児教育において育成された資質・能力を存分に発揮し、各教科等で期待される資質・能力を育成する低学年教育として滑らかに連続、発展させること。幼児期に育成する資質・能力と小学校低学年で育成する資質・能力とのつながりを明確にし、そこでの生活科の役割を考える必要がある。
- 幼児教育との連携や接続を意識したスタートカリキュラムについて、生活科固有の課題としてではなく、教育課程全体を視野に入れた取組とすること。スタートカリキュラムの具体的な姿を明らかにするとともに、国語、音楽、図画工作などの他教科等との関連についてもカリキュラム・マネジメントの視点から検討し、学校全体で取り組むスタートカリキュラムとする必要がある。
- 社会科や理科、総合的な学習の時間をはじめとする中学年の各教科等への接続が明確ではないこと。単に中学年の学習内容の前倒しにならないよう留意しつつ、育成を目指す資質・能力や「見方・考え方」のつながりを検討することが必要である。

これら4点は、第一の生活科学習における思考

力などの学びの構成と構造，第二から第四の幼児期から生活科，生活科と他教科との関連，1-2年の生活科と3-6年の社会科・理解の連携・接続との問題としてまとめられる。前者は生活科自身の学びの充実であり，後者は，幼児期から生活科，他教科，特に上学年の社会科，理科の連携・接続の充実である。本稿では後者の課題を取り上げ，その課題の理論的な問題，実践的な問題を掘り下げ，それらの発展として課題解決の可能性を追究したい。これらの課題は，ここ10数年指摘され続けられ，解決されず残されてきた長年の課題でもある（寺尾 2014, p.267）

そこで，本稿では，続いて，生活科と社会科における教科の本質とは何か，どのような関係にあり，どのような関係可能性があるのか，どうすればよいのかを考察することにした。

2. 生活科と社会科の教科構造

2.1 生活科の意義

生活科も社会科も教科である。しかし，生活科は，国語，算数などのような一般的な教科とは違っている（日台 1996, p.382）。それは，教科の本質と教科構造が異なるからである。

寺尾(2015 p.93)は，生活科の本質を次のようにまとめている。

その(生活科・引用者注)ねらいは，身近な人や社会，自然と関わる具体的な活動や体験を通して，児童が学習対象への気付きだけではなく，自分のよさや可能性に気付くことができるようにすることである。生活科には，教科学習の素地となる有意義な体験と気付きを得させる意義がある。

生活科の学習が，それ自体独自の活動や体験を進め，そこで学ぶ気付きが自己の可能性の気付きと結びつき，他の教科の学習の基礎をつくる。日台(1996)はさらに，「他の教科・領域等すべての教育活動の基盤となる人間教育を目指している」まで述べている(p.382)。

生活科はその教科独自のねらいを持ちつつ，他の教科や領域の基礎・基盤になるのである。

なぜそのような機能を生活科は持つのか。この問題を究明するために，教科の構造の基本的な考えに立ち返り，生活科を検討することにした。

教科の構造は，基本的に，目標—内容—方法の3つの要素を持ち，それらが目標を目的にして，有機的に結びつき，三角形の構造（下図1，参照）をしている（池野 2014, 2015）。

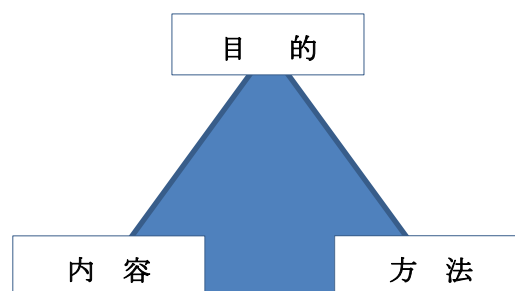


図1 教科の構造(池野 2015, p.100)

本稿で取り扱う生活科と社会科の2つの教科をこの教科の構造を適用し，それぞれの教科の構造の特質を明らかにすることにした。

2.2 生活科の教科構造

(1)生活科の成立事情

生活科は，成立に尽力した一人である中野(1992)によれば，「小学校教育の大きな変革」であった(p.1)。それは，生活科の新設によってもたらされた教科の改廃は，小学校教育の在り方を変えるものであるというのが中野の理解である。

この理解にもとづくと，低学年の社会科と理科が廃止され，生活科が新設されただけでなく，小学校教育そのものを変えることを意味する。それは，「伝統的な学校教育の在り方，すなわち，授業の在り方に変革を求めた」のである(p.2)。

生活科は，次の4つを目指している(中野 1990, pp.1-3, 1992, pp.35-44)

1. 体験重視
2. 個性尊重
3. 学校と家庭，地域とのかかわり

4. 授業の変革

これらを進めると、従来学校が持っていた教育観である伝統的な「教師主導の授業観」(中野 1992, p.2) に変革を求め、「二一世紀への学校づくり」(中野 1990, p.2) が進められるという。そして、「子供が動き、考え、自ら身に付ける授業」(中野 1990, p.2) を作り出し、新しい小学校教育を生み出す。そこに生活科の意義があるというのである。

(2)生活科の教科の構造

では、その生活科はどのような教科であるのか。2017(平成 29)年改訂新学習指導要領における生活科の目標は、次のように示されている(文部科学省 2017a, p.112)。

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。
- (2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。
- (3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

この目標は、他の教科と同様、資質・能力の3つの柱、「知識・技能(の基礎)」、「思考力、判断力、表現力等(の基礎)」、「学びに向かう力、人間性等」で整理され、内容や方法の基盤にもなっている。

生活科という教科の本質が、「具体的な活動や体験を通して、・・・(中略)・・・自立し生活を豊かにしていくための資質・能力」を育成することにあることが理解される。

この目標記述は目標を示しているとともに、目標に基づくその教科の内容と方法の概要も示して

いる。目標の記載＝提示において内容、方法を含意し、教科の構造を示している。

その特質は、内容として、人・自分、社会、自然を取り上げ、自分と社会、自分と自然の関わりように、自己と対象の関係を内容選択の原理としている。2017年改訂生活科では、内容は、三角形による3つの階層で整理されている(文部科学省 2017b, p.26)。

第一層は学校、家庭及び地域の生活、第二層は身近な人々、社会及び自然と関わる活動、第三層は自分自身の生活や成長であり、第一層から上に学習が進行する。

また方法でも活動や体験が重視され、児童がこれらの内容を自分自身、あるいは友達とともに関わるように組織される。

生活科は、目標自身が内容と方法の三角形で表記され、それに準じた教科構造を採っている。その基本的な枠組みが、児童の発達特性に基づいており、ひと、人間としての生き方に関わる基礎的な教育を担当する(日台 1996, p.382)。この意味で、生活科は他の教科、また領域の基礎・基盤となる人間そのものの教育を行っている。

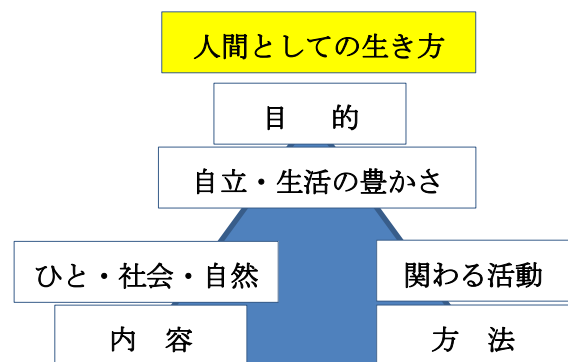


図2 生活科の構造(筆者作成)

2.3 社会科の教科構造

一方、社会科は、国語、算数などとともに、特定の内容を明確に持っており、背景とする学問研究も持っている。地理・歴史を含んだ社会を主たる内容とし、人文・社会科学の広い範囲の学問研究を背景として持っている。

2017(平成 29)年改訂新学習指導要領における

社会科の目標は、次のように示されている（文部科学省 2017a, p.46）。

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 地域や我が国の国土の地理的環境，現代社会の仕組みや働き，地域や我が国の歴史や伝統と文化を通して社会生活について理解するとともに，様々な資料や調査活動を通して情報を適切に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
- (2) 社会的事象の特色や相互の関連，意味を多角的に考えたり，社会に見られる課題を把握して，その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりする力，考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う。
- (3) 社会的事象について，よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする態度を養うとともに，多角的な思考や理解を通して，地域社会に対する誇りと愛情，地域社会の一員としての自覚，我が国の国土と歴史に対する愛情，我が国の将来を担う国民としての自覚，世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚などを養う。

社会科の目標もまた，資質・能力の3つの柱，「知識・技能(の基礎)」，「思考力，判断力，表現力等(の基礎)」，「学びに向かう力，人間性等」で整理され，目標において内容や方法を示している。

社会科という教科の本質が，「・・・課題を追究したり解決したりする活動を通して，・・・(中略)・・・国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力」を育成することにあることが理解される。

このような記述は先の生活科と同様，いずれの

教科においても，目標を示しているとともに，目標に基づいたときのその教科の内容と方法の概要も示しているものである。目標の記載において内容，方法を含み，その教科の構造を示しているのである。

社会科も生活科と同様に，教科の構造を持っている。その目標は，「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力」を育てることである。これは社会科の目標であるが，学校教育の目標でもある。社会科は，生活科の目標のように，教育一般の人格形成を目標にはしないが，学校教育の目標を教科として引き受ける。そして，その目標を実現するために，社会にかかわる事象を内容に，その事象の見学，調査，検討・討論などの活動を方法にする（下図3，参照）。

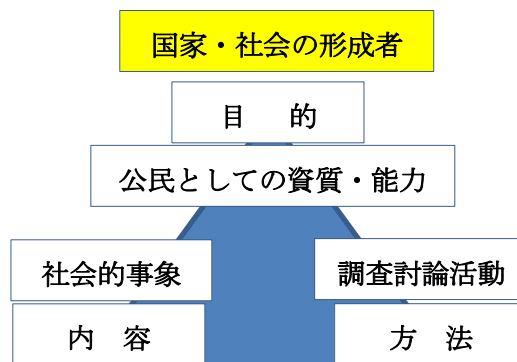


図3 社会科の構造(筆者作成)

社会科の教科の特質は，内容として，自分を含む人，社会，自然を取り上げ，人と社会，人と自然の関わりを社会的事象として，人と対象の関係を内容選択の原理とし，社会的事象を観察，見学，調査，討論などを活動し，目的を実現する。そして，社会科の目的は，一教科を超える学校教育の目的をも引き受けるのである。

2.4 生活科と社会科の教科構造

以上のように，生活科，社会科は目標を中心に，内容と方法を構成する，教科の構造を共に持っている。しかし，その構造内容は似ているところと異なっているところがある。

生活科と社会科が似ていることは、他の教科と違って、教科を超える目的、すなわち、生活科は教育一般の目的を、社会科は学校教育の目的を実現する点である。これらの目的をそれぞれの教科の構造に即して進めることが理解される。

異なる点は、その目的が、教育一般の目的、学校教育の目的、教科の目的と、その位置が違っていることである。生活科が教育一般の目的を志向し、社会科が学校教育の目的を志向することである。2つの教科は、他の教科の1つの教科を超えたものなのである。

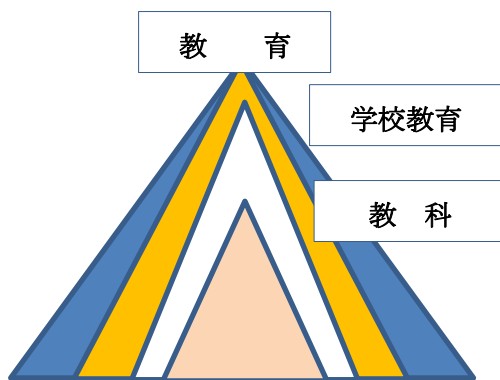


図4 教育の目標構造 (筆者作成)

生活科は、教科でありながら、自立、生活の豊かさという教育一般を志向している。そのために、教科としての生活の学習、教育としての自立の育成という目標の二重構造性をもっている。社会科は、一教科として、社会認識と公民的資質の育成を目標としてもっている。

2つの教科は、教科としては同一であるが、目標が異なり、生活科は教科を超え、教育一般の目標を担う。社会科も教科を超え、学校教育の目標としてその目標を遂行する。

生活科と社会科とはそれぞれ、目標において、教科の構造をもちつつ、生活科ではその構造が教育一般を志向するが、社会科では学校教育の目標を志向し社会科固有の教科の目標を実現する。すなわち、生活科と社会科は教科の構造では同一であるが、その目標の位置づけと性格が異なっているのである。

生活科と社会科の関係は、生活科の中に社会科

が包摂関係にあるとともに、それぞれ別々の教育の目標関係にあり、一教科を超えている。2つの教科が包摂関係にあるゆえに、生活科と社会科は密接な関係を持つことができる可能性がある。

しかし、これまでの学習指導要領が、生活科と社会科、理科との連携、接続を密にすることを課題に指摘してきた。それは、2つの教科が包摂関係にあるからである。研究や教育はこの包摂関係を自覚し、発展させることである。

3. 生活科と社会科の連携

3.1 連携するために

3.では、以上で指摘した生活科と社会科の包摂関係にもとづいて、現実にはどのような関係になっており、どのように発展させ、連携・接続を密にすることができるのかを類似単元を取り上げ、検討することにした。

生活科と社会科の両教科で似た単元として、まち(町)たんけん和地図指導を取り上げ、それぞれの指導と学習の特徴を明らかにし、2つの教科指導とその学習の特質、連携の可能性を究明することにする。

3.2 連携事例

(1) まち(町)たんけん

まち(町)たんけんは両教科で、子どもたちの生活圏を取り上げる。

生活科では、学校、家庭及び地域の生活に関する内容、身近な人々、社会及び自然と関わる活動内容が、教科書や学校では、まちたんけんとして組織されている(佐藤 2018,若村 2018, 参照)。それは、生活科の内容としては、第一層の(3)地域と生活、第二層の(4)公共物や公共施設の活用、(5)季節の変化と生活、(6)自然や物を使った遊び、(7)動植物の飼育・栽培、(8)生活や出来事の伝え合いのこれらを包括的に取り扱えるからである。

たとえば、2020(令和 2)年度から使用される新生活科教科書(『わたしとせいかつ』下巻(2年用) 日本文教出版)では、次のように構成されている。

2年生がはじまるよ
町たんけん1ーみんなでつかう場しょ
ぐんぐんそだて みんなの野さい
夏休みを楽しくすごそう
生きものはかせになろう
町たんけん2ーグループででかけよう
あそび名人になろう
こんなに大きくなったよ。

ここで、まちたんけんは、主として、(3)地域と生活、(4)公共物や公共施設の活用を取り扱うようになっていく。つまり、地域とのかかわりを社会的に取り扱うものとなっている。

それは、地域とは自分が関わる社会であり、その社会とのかかわりとは「身のまわりにある『ありのままの環境』とのかかわり」のことであり、それを学習していくことなのである(有田 1996, p.96)。

では、そのかかわりとはどうすることか。有田(1996, p.97)は次のように説明している。

生活科では、自分が身近な社会や自然とよい「つき合い」ができるようになることを指している。

友達や先生、近所の人などとあいさつを交わしたり、会話をしたり、電車の切符を買って電車に上手に乗ったり、買い物をしたり、店の人と会話を交わしたり、友達や親せきの人に電話をかけたり手紙を書いたりするのも、社会との「つき合い」である。

生活科における社会とのかかわりとは、社会科のように、客観的にとらえることではなく、子どもが社会にどのようにかかわっているのかに気づいたり、自分の身の回りのものやことを見直したり、自分なりの問題意識をもって調べたり考えたり表現したりすることを中心にしたものである。つまり、「社会的事象を客観的にとらえることがねらいではなく、子どもが生活者として社会や自然とどのようにかかわっているかを追究することがねらい」(有田 1996, p.97)なのである。

生活科のまちたんけんでは、身近な地域などのようすがわかればよいということではなく、そこで生活する生活者として、「よりよい生活ができるようになること」をねらいにしている(有田 1996, p.97)。

社会科の町たんけんは、地域を区分し、たとえば、東、西、南、北に分け、各部分に何がどのようにあるのかを(客観的に)調べ、その位置、配置、分布、人の往来、交通などをいわば、地域を空の上から、鳥の目で見、(地図記号に即して)地図に書き落とし、だれもが理解できるものにし、その地域がどのようなところかを客観的にわかること、地域の鳥瞰的理解、認識を育てる。

生活科と社会科のまち(町)たんけんは、同じ地域を取り上げながら、その取り上げ方が異なっている。生活科は子どもたちが地域に入って行ってその生活になじんで、つきあうように取り扱う。社会科は生活していることを活用しながら、例えば、地図記号やその表現方法というだれもが理解できまたわかることを基礎にして、その地域を客観的に説明するのである。

生活科は子どもたちが対象に入り込み、なじむようにつきあうために、会った人とあいさつすること、話をすること、切符を買って電車に乗ったり買い物をしたりすること、電話をしたり手紙を書いたりすることを活動に入れ込む。子どもたちがひと、社会や自然とのかかわりを意識し、よいつきあいができるようにする。

一方、社会科(また、理科)は対象となる人、社会、自然を客観的に、わたしとは切り離し、それ自体の成り立ち、在り方、構成や構造を見つける。例えば、駅の周りにはお店が多いとか、人が多いとかを見つけ、どうしてかという疑問を持ち、それを調べ、交通、人の移動経路、位置や分布などという地理学や社会科学で用いられる見方や考え方を持ち込み、より客観的に理解し分析し説明する。

生活科のまちたんけんが、社会との関わりを充実させることをねらいにするということは、幼稚園における社会や自然(身近な環境)との関わり

とのつながりが強いといえるだろう。有田(1996)は生活科設立当初より、幼稚園での身近な環境とのかかわり方を小学校「生活科で充実・発展したものにする」とかねらいており、重要であると指摘している(p.97)。幼稚園教育においても、同様に、指摘されており、現代の社会における社会の変化、とくに、地域社会とのつながりの希薄化傾向により、積極的に、意図的に、幼稚園等の幼児教育では、「家庭と地域をつなぐこと」が必要とされていると主張されている(津金 2018, p.6)。

新学習指導要領との関係では幼稚園等の幼児教育との生活科の連携が強調されているのはこのような事情があるからである。

(2) 地図指導

まち(町)たんけん結びついてたびたび指導されるのが、地図指導である。

生活科のまちたんけんでも、地図づくりがなされる。それは、子どもたちが見たものを見たように描く。とくには、社会科では当然のように教師が指導し子どもたちが行く、上が北という地図の規則に、生活科では従わず、子どもたちが見た通り、そのまま描く。それは、「ループマップ型」であり、社会科、小学校3、4年にみられる、方位、距離、記号などを使う「サーベイマップ」型とは違うものである(寺本 1996, pp.308-309)。

生活科では、例えば、通学路を描くとき、子どもたちは自宅から学校までを、一本の連続した線によって描きがちである。そこでは、自宅と学校の位置関係、方位、距離などはあいまいである。また、近道が描かれたり、分岐点が無視されたり、ニョロニョロと自分の感覚で描かれている(寺本 1996, p.308)。

ルートマップ型の地図で、子どもたちは通学路で見たり出会ったりするひと、店、木々や緑、標識など、子どもたちが気付いているものを描く。その描かれるひと、ものは子どもたちがその道筋で出会うものやこと、気づいたものやことが、道路の道筋に従い、その順序で描かれている。寺本(1996)によれば、トポロジー地図、つまり、位置

と場所を中心に描かれるのである(p.309)。

生活科での地図指導は、子どもたちが出会ったり気づいたりするひと、もの、ことを体験に基づき(絵)地図に描くことを跡付け、拡大させる。そこには、社会科で厳しく指導される地図の規則はあまり気にされない。子どもたちの心の中に描かれているメンタルなものを活かし拡大させる。それは、大人になっても心の中にもっている原風景のようなものである(寺本 1996, p.309)。

地図指導に関して、生活科と社会科での違いは、大きくは、地図規則を持ち込むか否か、子どもたちのメンタルなものや体験を重視するのか現実のものやことを重視するのか、自分中心なものを良しとするのか、だれにでも理解できるものを作り出すのか、である。

このような生活科と社会科における地図指導の違いを活用すると、社会科では、地図の規則に基づいた観察・表現を中心にしがちであるところに、子どもたちが体験に基づき関わりをもった参加を取り入れたり、クラス全体の学習のめあてとともに、個々の子どもたちのめあてを大切にしたり、生活科での自分との関わりから、自分たちとの関わりへ発展させたりする(岡山県小学校教育研究会社会科部会 1991, p.32)。

(3) 連携の構成と構造

以上で考察してきた、生活科と社会科の関係は、幼稚園教育に拡張して検討するべきであることが理解される。そして、その考察結果は次の2つにまとめられる。

幼稚園—生活科の連携関係は連続的発展的關係にあり、子ども自身の体験を重視し、それを表出させ、自分と環境とのかかわりを自分から環境へのアプローチを重視し充実させることに指導の重点がおかれる。

生活科—社会科の連携関係は連続的なものと、非連続的新規的關係にあり、土台と展開の關係にあるといえるだろう。すなわち、生活科で育ててきた自分から環境へのかかわり、体験重視の理解を踏まえ、それを拡大拡張するとともに、社会科

独自の地図指導，つまり，地図の規則，例えば，上は北，右は東，また地図記号に従った表現，換言すると，実際に記号化し誰もが理解できる客観的な観察と表現に作り替える。そして，子どもたち自身の社会との関わりによって，単に見えるものを表現するだけでなく，社会の側に入り込んで，その中に自分を入れ込み，社会にあるその社会的事象の，位置，関係，量と質，理由と根拠を子どもたちが考え，相互の理解や考察を深め，より合理的なものを作り上げる。

幼稚園—生活科—社会科の関係は自己から社会へのアプローチによる体験重視という点で，連続性を持ちつつ，生活科—社会科の関係は自己と社会を一度切り離し，社会の側に自己を入れ込み，その社会の側に立って，社会そのものを取り扱う発展的拡大的關係にある。

生活科と社会科との関係は，発展的拡大的關係なのである。この関係に立って，生活科の指導を社会科の指導へ発展し拡大させることが，2つの教科の連携・接続の関係である。

それは，生活科と社会科は子ども一人一人の体験を基盤にするが，社会科ではその基盤を超え，社会的事象として対象を見て，地図規則に従って，あるいは，社会的な見方，位置，場所，関係などを用いて，社会的事象を考え判断し表現する。そして，そこで見い出す知識や概念とともに，子どもたち同士で新たな理解や認識を作り出す。生活科の指導を活かし，発展させながら，それを乗り越え，社会科独自の指導を行うことが必要である。

4. 研究の総括

本稿は，小学校における1—2年の生活科と3—6年の社会科の関係とその接続の問題を検討することを目的としていた。

そのために，社会科の立場から，なぜ生活科と社会科の接続問題を取り上げるのかを説明したのちに，生活科と社会科における教科の特質に関して比較し，生活科と社会科で同じように取り上げられる類似単元を取り上げその取り扱いを分析し，2つの教科の関係を解明し，その連携の可能性を

明らかにした。

その結果は，次の6点にまとめることができる。

1. 生活科と社会科はともに教科であるが，教科としての性格が異なる。
2. 生活科は，人間形成的な教育を本質とした教科であり，一教科でありながら，教科を超えている。
3. 社会科もまたは，一教科でありながら，社会をわかる（社会認識），あるいは，社会を新たに作り出す（社会形成）を基本目的とし，公民的資質育成を教科目標としていることで，教科を超えている。
4. 生活科と社会科の両教科は，連携・接続しているところと，包摂・超越しているところがある。
5. 学習者（自己）と社会との関わりに着目すると，生活科は自己から社会への関わりを，社会科は自己と社会との相互の関わりを，それぞれ取り扱う。
6. 生活科と社会科は，生活科から社会科へ接続・連携することで，両教科ともに，知識・技能，思考力・判断力・表現力を発展させるとともに，それぞれの教科の目標達成に寄与する。

引用文献

- 有田和正「社会とのかかわり」中野重人・谷川彰英・無藤隆編(1996)『生活科事典』東京書籍，pp.96-97.
- 藤井達也・野田敦敬(2016)「理科と生活科の接続の意義に関する一考察—理科に関する学習および生活科の歴史的背景を視点として—」岐阜大学『教職キャリアセンター紀要』1，pp.1-8.
- 福士顯士(2014)「小学校生活科における『気付きの質』に関する一考察—生活科から理科への接続の視点から—」『川村学園女子大学研究紀要』25(2)，pp.71-87.
- 日台利夫(1996)「他教科との関連」中野重人・谷川彰英・無藤隆編(1996)『生活科事典』東京書籍，pp.382-383.

- 池野範男(2014)「日本の教科教育研究者とは何をする人のかー教科教育学と教師教育ー」日本教科教育学会編『日本教科教育学会誌』36(4), pp.96-102.
- 池野範男(2015)「教科教育に関わる学問とはどのようなものか」日本教科教育学会編『今なぜ、教科教育なのか』文溪堂, pp.99-102.
- 石川桂司(1994)「生活科における『遊び』についてー幼稚園との接続, 社会科・理科との接続の問題ー」『岩手大学教育学部研究年報』54(1), pp.75-87.
- 伊藤裕康(1996)「社会認識教育の体系化に関する基礎的研究ー社会科と生活科との相互関連・発展の視点からー」全国社会科教育学会編『社会科研究』44, pp.21-30.
- 加納誠司(2016)「社会的な見方・考え方につながる生活科の実践的研究ー空間・愛着・自己実現を手がかりにー」『愛知教育大学研究報告 教育科学編』65, pp.17-24.
- 片平克弘・唐木清志編著(2018)『初等生活科教育』ミネルヴァ書房.
- 緊急シンポ世話人会(1986)『社会科「解体論」批判』明治図書.
- 宮本光雄(1991)「初等教育における生活科と社会科の関連ー接続・発展ー」全国社会科教育学会編『社会科教育論叢』38, pp.28-29.
- 文部科学省(2017a)『小学校学習指導要領(平成29年告示)』文部科学省.
- 文部科学省(2017b)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 生活編』文部科学省.
- 中野重人(1990)『生活科の授業づくり Q&A』明治図書.
- 中野重人(1992)『新訂 生活科教育の理論と方法』東洋館.
- 中野重人(1996)「生活科の成立」中野重人・谷川彰英・無藤隆編『生活科事典』東京書籍, pp.12-15.
- 中野重人・谷川彰英・無藤隆編(1996)『生活科事典』東京書籍.
- 日本文教出版(2020)『わたしとせいかつ』(下巻), 日本文教出版 .https://www.nichibun-g.co.jp/textbooks/seikatsu/download/r2/r2_seikatsu_nenkei_jo.pdf. 2019年9月20日閲覧.
- 二階堂年恵(2012)「生活科と社会科との違いは何か」社会認識教育学会編『新 社会科教育学ハンドブック』明治図書, pp.308-315.
- 野田敦敬(2011)「生活科と理科の接続と区別を考える:気付きの質を高め, 科学的な見方・考え方の基礎を養う」『理科の教育』60(1), pp.5-8.
- 岡山県小学校教育研究会社会科部会編(1991)『学び方を培う生活科・社会科の授業』明治図書.
- 佐長健司(2001)「関連教育の研究」全国社会科教育学会編『社会科教育学研究ハンドブック』明治図書, pp.414-421.
- 佐藤孔美(2018)「初等生活科教育の実践③ー地域と生活ー」片平克弘・唐木清志編著『初等生活科教育』ミネルヴァ書房, pp.85-96.
- 末政公德(1993)『生活科と社会科ー関連を深める授業づくり』明治図書.
- 寺本潔(1996)「地図指導」中野重人・谷川彰英・無藤隆編『生活科事典』東京書籍, pp.308-309.
- 寺尾慎一(2014)「生活科」日本教育方法学会編『教育方法学研究ハンドブック』学文社, pp.264-267.
- 寺尾慎一(2015)「人, 社会, 自然との関わりを深め, 自分のよさや可能性への気付きを育てる生活科」日本教科教育学会編『今なぜ, 教科教育なのか』文溪堂, pp.93-98.
- 津金美智子(2018)「幼児が社会生活との関わりを深めるとは」『月刊 幼児教育じほう』2018年8月号, 46(5), pp.5-11.
- 津山裕(1996)「自分へのかかわり」中野重人・谷川彰英・無藤隆編『生活科事典』東京書籍, pp.98-99.
- 若村健一(2018)「初等生活科教育の実践④ー公共物や公共施設の利用ー」片平克弘・唐木清志編著『初等生活科教育』ミネルヴァ書房, pp.97-109.
- 渡部健・初沢敏生(2001)「小学校における生活科と社会科との関連」『福島大学教育実践研究紀要』

池野 範男

41, pp.51-58.